

平成25年度 病害虫発生予報 第10号

平成26年1月24日
栃木県農業政策指導センター

○いちごのハダニ類の発生が続いています！
○いちごとトマトの灰色かび病の発生に注意しましょう！

予想期間 1月下旬～2月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根拠 現在の発生量は平年並 (平年比：ほ場率92%、発生株率100%)。(±)
(3) 対策 向こう1か月の平均気温は低い見込みで、発生に適している。(+)
下葉を取り除き、風通しを良くするとともに、施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。
発病した葉や果実等は伝染源となるので速やかに取り除き施設外で処分する。
発生が見られたら、フルビカプロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤等を葉裏にも良くかかるように散布する。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根拠 現在の発生量はやや多い (平年比：ほ場率142%、発生株率180%)。(+)
(3) 対策 向こう1か月の平均気温は低い見込みで、発生にやや不適である。(±～-)
必要に応じて葉かきを行い、薬剤がかかりやすい状態を気門封鎖剤やスターマイトフロアブル等を散布する。
発生初期は症状に被害が出るため、こまめに観察して発生拡大前に防除する。
気門封鎖剤は殺卵効果がないため、必ず5～7日間隔で複数回散布する。また、殺卵効果のある薬剤と上手に組み合わせよう。
天敵観測は、ハダニ類が多いと効果が十分得られない。放飼前に必ず薬剤防除でハダニ類の密度を下げる。また、適宜追加放飼すると効果が安定する。
天敵観測は、防除効果が現れるまでに時間がかかる。放飼後は、こまめに虫めがね等で葉裏を観察し、天敵の定着とハダニ類の密度を確認する。
・「園芸作物に発生したナミハダニの薬剤感受性検定」、「ナミハダニに対する気門封鎖剤の効果試験」、植物防疫ニュース(速報No.22)を当センターHPに掲載中。

3 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
(2) 根拠 現在の発生量はやや少ない (平年比：ほ場率23%、発生花率50%)。(一)
(3) 対策 向こう1か月の平均気温は低い見込みで、発生にやや不適である。(±～-)
か]等のIGR剤(脱皮阻害剤)で増殖を防止する。
花を観察して、その1割以上でアザミウマ類が見られたときには、被害が大きくなるおそれがあるため、速効性のダイアナSC等で防除する。
(4) 備考 秋の開花が早かった施設では、春先の被害発生が早い傾向があるため、注意が必要である。
・「園芸作物と花きに発生したアザミウマ類の薬剤感受性検定結果(続報)上」、植物防疫ニュース(速報No.21)を当センターHPに掲載中。

4 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
(2) 根拠 現在の発生量はやや少ない (平年比：ほ場率28%、発生株率30%)。(一)
(3) 対策 向こう1か月の平均気温は低い見込みで、発生に適している。(+)
施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。

- (4) 備考 咲き終わった花弁や発病果、発病葉は感染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。
発生初期にカンタラトライフロアブル、サンコール等を散布する。
微生物防除資材(ボトキワー水和剤等)は発病前～発病初期に利用する。また、低温条件下では効果が出にくいので、施設内温度は10℃以上を確保する。
・「黒葉病(灰色かび病)の薬剤感受性検定①、②」上、植物防疫ニュース(速報No.25)を当センターHPに掲載中。

5 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根拠 現在の発生量は多い。(+)
(3) 対策 向こう1か月の平均気温は低い見込みで、発生に適している。(+)
施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。
肥料切れ等により生育が遅れると発生しやすいので、肥培管理に注意する。
(4) 備考 予防を主体にアミスター2フロアブル、トリアミン乳剤等を散布する。
植物防疫ニュース(速報No.26)を当センターHPに掲載中。

6 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
(2) 根拠 現在の発生量は平年並 (平年比：ほ場率83%)。(±)
(3) 対策 向こう1か月の平均気温は低い見込みで、発生にやや不適である。(±～-)
春先にかけてハウス内で越冬したコナジラミ類が増え始めるため、低密度のうちにディアンソCやコロマイト乳剤等で増殖を防止する。
コナジラミ類の防除と同時に、ほ場内の発病株を抜き取り処分する。
モペクトフロアブルはコナジラミ類に対して効果は高いが、授粉にマルハナバチを導入する場合には使用を避ける。
・「果菜類に発生したタバココナジラミの薬剤感受性検定結果」上、植物防疫ニュース(速報No.18)を当センターHPに掲載中。

7 その他の病害虫

いちご	発生予想	発生予想	発生予想	発生予想
アブラムシ類	やや多	やや多	やや多	やや多
べと病	やや多	やや多	やや多	やや多
うどんこ病	やや少	やや少	やや少	やや少
アザミウマ類	多	多	多	多
にら	やや少	やや少	やや少	やや少
きく	多	多	多	多
ハダニ類	白斑葉枯病	白斑葉枯病	白斑葉枯病	白斑葉枯病
ハダニ類	ネグニ類	ネグニ類	ネグニ類	ネグニ類
ハダニ類	白さび病	白さび病	白さび病	白さび病
ハダニ類	ハダニ類	ハダニ類	ハダニ類	ハダニ類

○農薬は適正に管理し、正しく使いましう！

☆ミツバチやマルハナバチに対する安全日数を目安に薬剤を選択しましょう。
☆同一薬剤の運用を選び、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

1か月気象予報(予報期間1月18日から2月17日 1月17日気象庁発表)

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率とも高い確率とも40%です。降水量は、平年並または少ない確率とも40%です。日照時間は、平年並または多い確率とも40%です。

項目	確率	平年並の確率	高い(多い)確率
気温	低い(少ない) 40%	40%	20%
降水量	40%	40%	20%
日照時間	20%	40%	40%

詳しくは農業政策指導センター(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>)までお問い合わせください。

Tel(028)626-3086

Fax(028)626-3012

平成25年度 病害虫発生予報 第11号

平成26年2月21日
栃木県農業環境指導センター

〇いちごとトマトの灰色かび病の発生に注意しましょう！

予想期間2月下旬～3月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想
発生量：やや多い
現在の発生量は昨年並(平年比:は揚率93%)。(±)
- (2) 根拠
向こう1か月の降水量は多い見込みで、発生に適している。(+)
下葉を除去し、風通しをよくするとともに、かん水は必要最小限にとどめる。
- (3) 対策
・発病した果実、果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
・発生初期にカンタスドライフロアブル、セイビアフロアブル20等を葉裏にもよくかかかのように散布する。
- (4) 備考
・「野菜類灰色かび病の薬剤感受性検定結果①、②」を当センターHPに掲載中。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想
発生量：昨年並
現在の発生量は昨年並(平年比:は揚率136%、株率161%)。(±)
- (2) 根拠
向こう1か月の日照時間が少ない見込みで、施設内の日中の気温が上がりやすく、増殖にやや不適である。(±～-)
- (3) 対策
・ハダニ類は下葉に多い見込みで、必要に応じて下葉かきを行う。
・気門封鎖剤等を葉裏にもよくかかかのように丁寧に散布する。
・気門封鎖剤は殺卵効果が無いため、必ず5～7日間隔で複数回散布する。また、殺卵効果のある薬剤と上手に組み合わせてもよい。
- (4) 備考
・天敵製剤を使用する場合、放飼前に一度防除し、ハダニ類の密度を下げる。また、適宜追加放飼すると効果が安定する。
・ハダニ類は防除効果が現れるまでに時間がかかる。放飼後はこまめに虫めがね等で葉裏を観察し、天敵の定着とハダニ類の密度を確認する。
・植物防疫ニュース(速報 No.22)「いちごのハダニ類が増殖しています」
・園芸作物に発生したナミハダニの薬剤感受性検定
「ナミハダニに対する気門封鎖剤の効果試験」を当センターHPに掲載中。

3 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想
発生量：やや少ない
現在の発生量はやや少ない(平年比:は揚率58%、花率72%)。(一)
- (2) 根拠
向こう1か月の日照時間が少ない見込みで、施設内の日中の気温が上がりやすく、増殖にやや不適である。(±～-)
- (3) 対策
・雑草はアザミウマ類の増殖源となるので、施設内外の除草を行う。
・発生が見られたら、低密度のうちにはカウンタラ乳剤かマツチ乳剤【カワケイワシ】等のIGR剤で増殖を防止する。
・花を観察して、その1割以上でアザミウマ類が見られた時は、被害が大きくなる恐れがあるため、スピノエース顆粒水和剤等を散布する。
・植物防疫ニュース(速報 No.28)「いちごのアザミウマ類の被害発生に注意しよう」
- (4) 備考
「園芸作物と花きに発生したアザミウマ類の薬剤感受性検定結果(続報)」を当センターHPに掲載中。

4 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想
発生量：やや多い
現在の発生量はやや少ない(平年比:は揚率72%)。(一)
- (2) 根拠
・低温により葉先枯れが発生し、連続した降雪により施設内が多湿になっている。(±)
・向こう1か月の降水量は多い見込みで、発生に適している。(十)

(3) 対策

- ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を防止する。
- ・発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。
- ・暖房機を利用したポトキアラ水和剤(野菜類)のダクト内投入を行う。なお、本剤は発病前からの継続した使用が効果的である。
- ・発生初期にダイマジン、セイビアフロアブル20等を散布する。
- ・ポトキアラ水和剤(野菜類)は発病前～発病初期に利用する。また、低温条件下では効果が出にくいので、施設内温度は10℃以上を確保する。
- ・植物防疫ニュース(速報 No.25)「トマト灰色かび病対策は予防と初期防除が重要です」、「野菜類灰色かび病の薬剤感受性検定結果①、②」を当センターHPに掲載中。

(4) 備考

- ・発生量：多い
現在の発生量は多い(平年比:は揚率335%、株率270%)。(十)
- ・連続した降雪により施設内が多湿になっている。(十)
- ・向こう1か月の降水量は多い見込みで、発生に適している。(十)
- ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を防止する。
- ・肥料切れ等により生育が衰えると発生しやすいので、肥培管理に注意する。
- ・発生初期にポリオキシンAL乳剤、アフェットフロアブル等を散布する。
- ・植物防疫ニュース(速報 No.26)「トマト葉かび病の発生が増えています」を当センターHPに掲載中。

5 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想
発生量：多い
現在の発生量は多い(平年比:は揚率335%、株率270%)。(十)
- (2) 根拠
・連続した降雪により施設内が多湿になっている。(十)
- (3) 対策
・向こう1か月の降水量は多い見込みで、発生に適している。(十)
- ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を防止する。
- ・肥料切れ等により生育が衰えると発生しやすいので、肥培管理に注意する。
- ・発生初期にポリオキシンAL乳剤、アフェットフロアブル等を散布する。
- ・植物防疫ニュース(速報 No.26)「トマト葉かび病の発生が増えています」を当センターHPに掲載中。

6 その他の病害虫

いちご トマト きゅうり	アブラムシ類 コナジラミ類 べと病	現況 多 やや少 やや多	発生予想 やや多 やや少 やや多	現況 平年並 少 やや多	発生予想 平年並 やや少 平年並

春の病害虫防除対策

- 水稲 イネ縮葉枯病(ヒメトビウモカ媒介)
・イネ縮葉枯病の多発が懸念される県中南部では、抵抗性品種の作付けや、同病媒介虫のヒメトビウモカに効果のある箱施用剤を使用しましょう。
・植物防疫ニュース(速報 No.27)「イネ縮葉枯病ウイルス保毒虫率が高まっています！」
「箱施用剤対策のポイントNo.17」を当センターHPに掲載中。
- 水稲 イネドロオイムシ
・前年発生が多く見られたほ場の周辺では、イネドロオイムシ成虫が多く越冬していると考えられます。成虫は5月下旬に本田への侵入を開始し産卵するため、被害が懸念されるほ場ではイネドロオイムシに適用のある箱施用剤を使用しましょう。
- いちご 類株床
・親株床には病害虫の発生していない株を選別し、定植しましょう。

☆ 同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう！

- ☆ ミツバチやマルハナバチに対する安全日数をローテーションに薬剤を選択しましょう。

1 か月気象予報(予報期間2月15日から3月14日 2月14日気象庁発表)

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。向こう1か月の降水量は、多い確率60%です。日照時間は、昨年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は昨年並の確率50%です。2週目は高い確率50%です。

〇気温	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
〇降水	30%	30%	40%
〇日照時間	10%	40%	60%
	40%	40%	20%

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>)までお問い合わせください。
病害虫情報発表のお知らせは「農政部ツイッター(@tochigi_nousei)」でも発信中です。

Tel (028) 626-3086 Fax (028) 626-3012

平成25年度 病害虫発生予報 第12号

平成26年3月14日
栃木県農業環境指導センター

〇いちごの害虫類が増加しています！早めの防除を心掛けてみましょう！

予想期間3月下旬～4月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
 (2) 根 現在の発生量は平年並(平年比:ほ場率130%)。(±)
 ・向こう1か月の平均気温は、2週目以降平年並～高い見込みで、発生にやや不適である。(±～+)
 (3) 対策 下葉を除去し、風通しをよくするとともに、かん水は必要最小限にとどめる。
 ・発病した果実、果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
 ・発生初期に、ソルピコフロアブル、ジヤストミート顆粒水和剤等を葉裏にもよくかかるとよいと散布する。
 (4) 備考 「野菜類灰色かび病の薬剤感受性検定結果①、②」を当センターHPに掲載中。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
 (2) 根 現在の発生量はやや多い(平年比:ほ場率148%、株率132%)。(+)
 ・向こう1か月の平均気温は、2週目以降平年並～高い見込みで、増殖にやや適している。(±～+)
 (3) 対策 ハダニ類は下葉に多いことが多いので、必要に応じて下葉をかき取る。
 ・気門封鎖剤は殺卵効果が無いため、必ず5～7日間隔で複数回散布する。また、殺卵効果のある薬剤と上手に組み合わせてもよい。
 (4) 備考 天敵製剤は防除効果が現れるまでに時間がかかる。放飼後はこまめに虫めがねなどを使用して確認する。天敵の定着とハダニ類の密度を確認する。
 ・植物防疫ニュース(連報No.22)「いちごのハダニ類が急増しています」、「園芸作物に発生したナミハダニの薬剤感受性検定」、「ナミハダニに対する気門封鎖剤の効果試験」を当センターHPに掲載中。

3 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
 (2) 根 現在の発生量は平年並(平年比:ほ場率67%、花率67%)。(±)
 ・向こう1か月の平均気温は、2週目以降平年並～高い見込みで、増殖にやや適している。(±～+)
 (3) 対策 雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、施設内外の除草を行う。
 ・発生が見られたら、低密度のうちにカスケード乳剤[シカゴアザミウマアクトロン乳剤(シカゴアザミウマ)]等のIGR剤で増殖を防止する。
 ・花を觀察して、その1割以上でアザミウマ類が見られた時は、被害が大きくなる恐れがあるため、ディアンサS C等を散布する。
 (4) 備考 植物防疫ニュース(連報No.28)「いちごのアザミウマ類の被害発生に注意しましょう」、「園芸作物と花きに発生したアザミウマ類の薬剤感受性検定結果(総報)」を当センターHPに掲載中。

4 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
 (2) 根 現在の発生量はやや少ない。(－)
 (3) 対策 低温により葉先枯れの発生が多い。(+)
 ・向こう1か月の平均気温は、2週目以降平年並～高い見込みで、発生にやや不適である。(±～－)
 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖

房機等を稼働し、植物体表面の結露を防止する。
 ・養病果、養病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。
 ・暖房機を利用したボトキラー水和剤(野菜類)のダクト内投入を行う。なお、本剤は発病前からの継続した使用が効果的である。

- (4) 備考 発生初期にポリオキソシンAL水和剤、ジヤストミート顆粒水和剤等を散布する。
 ・ボトキラー水和剤(野菜類)は発病前～発病初期に利用する。また、低温条件下では効果が出るので、施設内温度は10℃以上を確保する。
 ・植物防疫ニュース(連報No.29)「トマト灰色かび病の発生増加が懸念されています」上、「野菜類灰色かび病の薬剤感受性検定結果①、②」を当センターHPに掲載中。

5 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
 (2) 根 現在の発生量は多い(平年比:ほ場率188%)。(+)
 ・向こう1か月の平均気温は、2週目以降平年並～高い見込みで、発生にやや不適である。(±～+)
 (3) 対策 施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を防止する。
 ・肥料切れ等により生育が遅くなるので、肥料管理に注意する。
 ・発生初期にベルクートフロアブル、サブロー乳剤等を散布する。
 (4) 備考 植物防疫ニュース(連報No.26)「トマト葉かび病の発生が増えています」を当センターHPに掲載中。

6 その他の病害虫

- いちご どうご病 アブラムシ類 発生予想 やや少 多
 トマト コナジラミ類 発生予想 やや少 多
- 春の病害虫防除対策**
 ○水稲 イネ縹葉枯病(ヒメトビウモカ媒介)
 ・イネ縹葉枯病の多発が懸念される県中南部では媒介虫に効果のある箱施用剤を使用しましょう。
 ・植物防疫ニュース(連報No.27)「イネ縹葉枯ウイルス保毒虫率が急上昇しています」上、「縹葉虫防除対策のポイントNo.17」を当センターHPに掲載中。
 ○いちご親床
 ・親床には病害虫の発生していない株を選別し、定植しましょう。
 ○トマト コナジラミ類
 ・気温の上昇に伴い、施設内で越冬したコナジラミ類が今後急増するおそれがあります。コナジラミ類を野外に出さないよう、防除を徹底しましょう。特に、タバココナジラミは黄化葉巻病を媒介するため、注意が必要です。
 ○なし 黒星病
 ・一次伝染時期となるりん片脱落期から開花期は最重要防除時期です。果そう基部病斑(芽基部病斑)の摘み取りを徹底し、2分咲きから着花直後に治療効果があるDMI剤を散布しましょう。

農薬は適正に管理し、正しく使いましょう！

- ☆ 同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーションで散布しましょう。
 ☆ ミツバチやマハナハチに対する安全日数を必ず確認し、事前に薬剤を選択しましょう。

1か月気象予報(予報期間3月8日から4月7日 3月7日気象庁発表)

天気が数日で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。
 週別の気温は、1週目は、低い確率80%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

○気温	低い(少ない) 確率	高い(多い) 確率
○降水量	30%	40%
○日照時間	30%	40%

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpmm.nes.jp/tochigi/index.html>)までお問い合わせください。
 病害虫情報発表のお知らせは「農政部ツイッター(@tochigi_noussei)」でも発信中です。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成26年度 病害虫発生予報 第1号

平成26年4月18日
栃木県農業環境指導センター

○トマト葉かび病の発生に注意し、適切に防除しましょう！

予想期間4月下旬～5月下旬

予報の根拠、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想
(2) 根拠
(3) 対策
- 発生量：**平年並**
 - 現在の発生量は平年並(平年比：ほ場率89%、株率86%)。(±)
 - 向こう1か月の平均気温は平年並～低い見込みで、発生にやや不適である。(±)
 - 適正な温度管理や換気、かん水等を行う。
 - 発病果は伝染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。
 - 発生初期にガツテン乳剤、サンリット水和剤等を葉裏にもよくかかるとともに散布する。

2 いちご アブラムシ類

- (1) 発生予想
(2) 根拠
(3) 対策
(4) 備考
- 発生量：**やや多い**
 - 現在の発生量はやや多い(平年比：ほ場率160%、株率120%)。(+))
 - 向こう1か月の平均気温は平年並～低い見込みで、発生にやや不適である。(±)
 - 今後、施設が開放され、施設外からの飛び込みが増加する。(+))
 - 発生が見られた場合は、モスピラン顆粒水添剤、ワララDF等を散布する。
 - 植物防疫ニュース(H25速報No.30)「いちごのアブラムシ類が増加しています」を当センターHPに掲載中。

3 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想
(2) 根拠
(3) 対策
(4) 備考
- 発生量：**平年並**
 - 現在の発生量は平年並(平年比：ほ場率64%、株率100%)。(±)
 - 向こう1か月の平均気温は平年並～低い見込みで、発生にやや不適である。(±)
 - 今後、施設が開放され、施設外からの飛び込みが増加する。(+))
 - 発生初期はカウンター乳剤、多発時はデアオナSC等を散布する。
 - 植物防疫ニュース(H25速報No.28)「いちごのアザミウマ類の被害発生に注意しましょう」、「園芸作物と花きに発生したアザミウマ類の薬剤感受性検査結果(経報)」を当センターHPに掲載中。

4 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想
(2) 根拠
(3) 対策
(4) 備考
- 発生量：**多い**
 - 現在の発生量は多い(平年比：ほ場率188%、株率260%)。(+))
 - 向こう1か月の平均気温は平年並～低く、降水量は平年並の見込みで発生にやや適している。(±～+)
 - 施設内が多湿にならないよう、換気やかん水に注意する。
 - 発病葉は感染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。
 - 生育が衰えると発生しやすいので適正な樹勢管理を行う。
 - 発生初期にアフエットフロアブル、フアンダジスタ顆粒水和剤等を散布する。
 - 植物防疫ニュース(H25速報No.26)「トマト葉かび病の発生が増えています」を当センターHPに掲載中。

5 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想
(2) 根拠
(3) 対策
- 発生量：**平年並**
 - 現在の発生量は平年並(平年比：ほ場率130%、株率70%)。(±)
 - 向こう1か月の平均気温は平年並～低い見込みで、発生にやや不適である。(±)
 - 雑草はコナジラミ類の増殖源になるので、施設内外の除草を行う。
 - 早期発見に努め、密度の低い時点で、アニキ乳剤、コルト顆粒水和剤等を散布する。

(4) 備考

- 植物防疫ニュース(H26速報No.1)「トマト黄化葉萎縮病の媒介虫であるタバコユナゾラミを駆除し、伝染源を断ちましょう！」を当センターHPに掲載中。

6 きく アザミウマ類

- (1) 発生予想
(2) 根拠
(3) 対策
(4) 備考
- 発生量：**多い**
 - 現在の発生量は多い(平年比：ほ場率280%、株率150%)。(+))
 - 向こう1か月の平均気温は平年並～低く、発生にやや不適である。(±～+)
 - 今後、施設が開放され、施設外からの飛び込みが増加する。(+))
 - 雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、ほ場内外を除草する。
 - 病株からの持ち込みに注意する。
 - 施設開口部に防虫ネットを張ることにより、アザミウマ類の侵入を防ぐ。
 - 発生初期から、マツチチ乳剤【油剤(わず)液】やトクチオオン乳剤等を散布する。
 - アザミウマ類はウイルス病(キク茎えそ病、キクえそ病等)を媒介するので注意する。
 - 当センターHPに「園芸作物と花きに発生したアザミウマ類の薬剤感受性検査結果(経報)」に掲載中。

7 その他の病害虫

いちご トマト	ハダニ類 灰色かび病 黄化葉萎縮病	発生予想 平年並 やや少 平年並	現況 平年並 やや少 平年並	発生予想 平年並 やや少 平年並	現況 平年並 平年並 やや多 やや多
			きゅうり	うどんこ病 アザミウマ類	
			きく	白さび病	

○イネ綿葉枯ウイルス保毒虫率が高まっています！

- イネ綿葉枯病の多発が懸念される県中南部では、同病媒介虫のヒメトビウモカに効果のある箱施用剤を使用しましょう。
- 植物防疫ニュース(H25速報No.32)「平成26年産稲作におけるイネ綿葉枯病防除対策について」及び「病害虫防除対策のポイントNo.17」を当センターHPに掲載中。

○表類の赤かび病は適期に防除を行いましょう！

- 出穂や開花状況をよく観察して、適期に赤かび病防除を行います。
- 植物防疫ニュース(H25速報No.31)「表類の赤かび病防除は適期に行いましょう！」を当センターHPに掲載中。

○いちごの親株床の管理は適切に行いましょう！

- 本ほから親株床へうどんこ病やハダニ類の持ち込みを防止するため、管理作業は別々に行うようにしましょう。

○ナシ黒星病の重点防除を行いましょう！

- 開花期前後は最重要防除時期です。果そう基部病斑(芽基部病斑)の摘み取りを徹底し、2分咲きから落花直後に拮抗効果のあるDMI剤を散布しましょう。

☆ミニツバチやマルハナバチに対する安全日数を目安に薬剤を選択しましょう。

☆同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーションで散布しましょう。

農業は適正に管理し、正しく使いましょう！

- 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多い見込みです。週別の気温は、1週日は平年並または低い確率ともに40%です。2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

1か月気象予報(予報期間4月12日から5月11日 4月10日気象庁発表)

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多い見込みです。週別の気温は、1週日は平年並または低い確率ともに40%です。2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

気温	低い(少ない)	確率	平年並の確率	高い(多い)	確率
降水	40%		40%	20%	
日照時間	30%		40%	30%	
	20%		40%	40%	

NEWS & INFORMATION

- 「平成26年度 農作物等病害虫雑草防除の手引き」が発行されています。お求めの方は、栃木県農業者総会(028-647-2622)にお問い合わせ願います。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.ippnn.jp/tochigi/index.html>)までお問い合わせください。
病害虫情報発表のお知らせは「農政部ソーター(@tochigi_nouse)」でも発信中です。

Te1(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成26年度 病害虫発生予報 第2号

平成26年5月23日
栃木県農業環境指導センター

〇水稲の縞葉枯病の多発生に注意しましょう

予想期間5月下旬～6月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稲 縞葉枯病 (ヒモビトウカ媒介)

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根 拠 昨年の再生稲の発病株率は高い。(+)
(3) 対 策 ウンカ類の越冬世代幼虫の発生量はやや多く、ウイルスの保虫率は過去10年で最も高い。(+)
(4) 備 考 ・発生が多い地域では、地域ぐるみで本田期防除を実施する。
・防除対策のポイントNo.17 (水稲・縞葉枯病)、平成25年度植物防疫ニュースNo.32 (水稲・縞葉枯病) をセンターHPに掲載中。

2 麦類 赤かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
(2) 根 拠 ・現在の発生量は少ない。(+)
(3) 対 策 ・向こう1か月の降水量は平年並の見込みである。(+)
・大麦は場で不発粒の発生がみられ、二次伝染のおそれがある。(+)
・薬剤耐性菌の発生を防ぐため、同一薬剤の連用を避ける。
(4) 備 考 ・赤かび病発生時は、赤かび粒混入防止のために刈り分けを行う。
・平成25年度植物防疫ニュースNo.31 (麦類・赤かび病) をセンターHPに掲載中。

3 いちご (観株)

- (1) 発生予想 ハダニ類
(2) 根 拠 発生量：やや多い
・主要薬剤の殺虫効果が低下しており、密度抑制が困難である。(+)
(3) 対 策 ・向こう1か月の平均気温は低い～平年並の見込みで、発生にやや不適である。(+)
・本ばで薬剤抵抗性を発達させたハダニ類を親株に持ち越さないために、本ば作業後に親株の管理作業を行わない。
・雑草はハダニの発生源となるため、除草を徹底する。
(4) 備 考 ・気門封鎖剤やチリカブ剤[野糞類(施設栽培)]を活用し、有効薬剤を温存する。なお、一部の殺虫・殺菌剤は天敵に悪影響があるため注意する。
・「園芸作物に発生したハダニの薬剤感受性検査結果」をセンターHPに掲載中。

4 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
(2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(平年比：は場率93%、株率78%)。(+)
(3) 対 策 ・向こう1か月の平均気温は平年並～低く、日照時間は平年並～少ない見込みで発生にやや不適である。(+)
・発生源となる施設内外の雑草を除去する。
・生管に応じて葉かきを行い、幼虫を除去する。
・栽培終了時には、野外への飛散を防ぐため、全ての株を株元で切断後、ハウスの上昇とともに増殖速度が早まるため、成虫も効果の期待できるサンアイトフロアブル、アニキ乳剤、コルト顆粒水和剤等で防除する。
(4) 備 考 ・蒸し込み時の過度な高温は、施設内の器具を傷めることがあるので注意する。
・植物防疫ニュースNo.1 (トマト・黄化葉巻病)、「果菜類に発生したタバココナジラミの薬剤感受性検査結果」をセンターHPに掲載中。

5 なし 黒星病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
(2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比：ほ場率41%)。(+)
・向こう1か月の平均気温は平年並～低く、降水量は平年並の見込みで、発生

- (3) 対 策 にやや適する。(+)～(土)
・芽基部病斑上の胞子形成抑制のため、ベルクートフロアブル、フルーツセイバー等を散布する。
(4) 備 考 ・「ナン黒星病菌の簡易薬剤感受性検査」をセンターHPに掲載中。

6 果樹 カメムシ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根 拠 ・昨年のスズメバネ、ヒノキ花粉量が多かったため、越冬量は多いと考えられる。(+)
(3) 対 策 ・夜温が下がらない蒸し暑い日の日没時に飛来が多い。こまめに園内を観察し、飛来が認められたら防除する。
(4) 備 考 ・未発生園での過度な防除はハダニ類やカイガラムシ類等の天敵層を破壊し、他の害虫種の多発に繋がると注意する。
・山林に隣接したり、過去に被害が大きかった果樹園では特に注意する。
・防除は夕方から早朝に行くと効果が高いが、早朝の薬剤散布時には近隣への騒音に注意する。

7 その他の病害虫

水稲	いもち病	現 況	発生予想	野 菜 類	アブラムシ類	現 況	発生予想
きゅうり	いもち病	—	やや多	きく	アブラムシ類	—	やや多
	体付いもち病	—	やや多		白さび病	—	やや多
	うどんこ病	—	やや少		アブラムシ類	—	やや多

〇トマト、きゅうり、いちご等の施設栽培の病害虫は次作に持ち越さず封じ込めましょう!

ユウリ黄化ウイルスはトマト黄化葉巻病とキユウリ退縮黄化病を、ミナミキイロアザミウマはキユウリ黄化ウイルスを媒介します。両害虫は野外で冬を越せないため、春以降に施設から飛散した害虫が野外で増殖し、次作の被害発生の原因となります。飛散を防止して伝染路を断つことが重要ですが、栽培末期の病害虫は、各種薬剤に抵抗性を発達させているおそれがあります。葉かき後の葉や残渣には病害虫が付着しているため、そのままは場内外に放置すると抵抗性の病害虫の拡散につながります。



施設栽培では、施設内の害虫が野外に飛散しないよう、栽培終了時にハウスの密閉蒸し込み等で防除しましょう。管理作業で除去した葉や栽培後の残渣は、ほ場内外にそのまま放置せず、適切に処分しましょう。

農業は適正に管理し、正しく使いましょう!

☆ミミツバチやマルハナバチに対する安全日数を目安に薬剤を選択しましょう。
☆同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーションで散布しましょう。

1か月気象予報 (予報期間5月17日から6月16日 5月15日気象庁発表)

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いため、週別の気温は、1週目は、平年並または低い確率ともに40%です。2週目は、低い確率60%です。3～4週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

〇気温	低い (少ない) 確率	平年並の確率	高い (多い) 確率
〇降水量	50%	40%	10%
〇日照時間	30%	40%	30%
	40%	40%	20%

NEWS & INFORMATION

- ☆「栃木県農業管理指導士」養成研修 (7月22・23日)、更新研修 (7月22日) が開催されます。
申込期間は6月2～27日となります。特に更新対象者の方はお忘れなくお申し込みください。
詳しくは、農業経営技術環境保全型農業担当までお問い合わせください。Tel (028)623-2286
☆県では、農薬による事故等の発生防止を図るため、6月から8月の3か月間を「農薬危害防止運動期間」とし、農薬の適正使用などについて啓発活動を行います。
☆「平成26年度 農作物等病害虫雑草防除の手引き」が発行されています。お求めの方は、栃木県農業者懇談会 (028-647-2622) にお問い合わせください。

詳しくは農業環境指導センター (<http://www.jpnn.ne.jp/tochigi/index.html>) までお問い合わせください。
病害虫情報発表のお知らせは「農政部ツイッター (@tochigi_nousei)」でも発信中です。
Tel (028)626-3086 Fax (028)626-3012

平成26年度 病害虫発生予報 第4号

平成26年7月18日
栃県農業環境指導センター

○水稲の斑点米カメムシ類の発生に注意しましょう！
○イチゴ炭疽病の発生に注意しましょう！

予想期間 7月下旬～8月下旬

予報の根拠で、(1)は増加要因、(一)は減少要因を表す。

1 水稲 斑点米カメムシ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠 7月中旬のすくい取り調査での発生量は \bar{x} 年並(\bar{x} 年比：成幼虫数84%)。(±)
- (3) 対策 向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
穂そろい期に斑点米カメムシ類が水田内で見られる場合は、乳熟初期(出穂期7～10日後)までにMR、ジョーカーEW、スターカール(スターカールメイト)液剤10等を散布する。
- (4) 備考 防除後も斑点米カメムシ類が見られる場合は、7～10日間隔で1～2回の追加散布を行う。
植物防疫ニユメNo.9(水稲・斑点米カメムシ類)を当センターHPに掲載中。

2 水稲 いもち病

- (1) 発生予想 発生量： \bar{x} 年並
- (2) 根拠 現在の発生量はやや少(年比：ほ場率42%、株率5%)。(一)
- (3) 対策 BLASTAM(葉いもち感染好適日条件)では、7月上旬に感染好適口が連続している(13日現在)。(+)
- (4) 備考 向こう1か月の平均気温は高く、降水量は \bar{x} 年並～多い見込みである。(±)
発生が見られた場合には、早急にブラシンプロアブル等の予防・治療効果のある薬剤を散布する。
感染好適条件は平均気温20℃前後で、弱い連続降雨がある時。
BLASTAMの曹型を当センターHPに掲載中。

3 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠 現在の発生量は \bar{x} 年並(年比：ほ場率164%)。(±)
- (3) 対策 向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
水滴の飛散等で伝染するので、頭上かん水は避け、できるだけ水の跳ね返りのないかん水を行う。
風通しを良くするとともに、茎葉のぬれ時間が長ならないよう、かん水はできるときは晴天日の午前中に行い、曇雨天日及び夕方のかん水を控える。
症状が出てからの防除は困難なので、予防を主体にべルコート水和剤、アントラコーン顆粒水和剤等をローテーションで散布する。
発病株、炭疽病した葉及びランナーは見つけ次第取り除き、ほ場外で処分し、速やかにサンリット水和剤やゲッター水和剤等を散布する。
植物防疫ニユメNo.8(いちご・炭疽病)を当センターHPに掲載中。

4 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠 現在の発生量は \bar{x} 年並(年比：ほ場率141%)。(±)
- (3) 対策 主要薬剤の殺虫効果が低下しており、密度抑制が困難である。(+)
向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
苗による本ばへの持ち込みを防ぐため、育苗床での防除を適正に行う。
気門封鎖剤を活用し、有効薬剤を温存する。
園芸作物に発生したナミハダニの薬剤感受性検定結果」を当センターHPに掲載中。

5 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠 現在の発生量は \bar{x} 年並(年比：ほ場率117%、葉率47%)。(±)

- (3) 対策 向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
ほ場周辺の除草を徹底する。
施設の開口部に0.4mm目以下の防虫ネットを張り侵入を防ぐ。光反射シートや紫外線カットフィルムも効果がある。
今後定植する作型では、育苗期及び定植時にペストガード粒剤等を施用する。
タバココナジラミミミはトマト黄化葉萎黄ウイルスを媒介するので注意する。
「果菜類に発生したタバココナジラミの薬剤感受性検定結果」を当センターHPに掲載中。

6 大豆・野菜類・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠 7月第2半旬までのフエロモントラップへの誘殺数は多い。(+)
- (3) 対策 向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
定期的には場所を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに撤去取り処分する。
ハスモンヨトウの幼虫は齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期に薬剤を散布する。

7 野菜類・花き類 タバコガ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠 7月第2半旬までのフエロモントラップへの誘殺数はやや多い。(+)
- (3) 対策 向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
向こう1か月に、浸透移行性の高い薬剤(プレバシンプロアブル5)<適用作物：トマト、なす等>[材が功]、アニキ乳剤<適用作物：いちご、トマト、なす、きく等>[材が功]で防除する。
施設栽培では、開口部に防虫ネット等を張り、侵入を防ぐ。
植物組織内部に食入するため、被害果実にはほ場外に持ち出して適切に処分する。
果実や花、頂芽などに寄生するため、防除が遅れると被害が大きくなる。寄生されやすい部位をこまめに観察する。

8 その他の病害虫

- | 水稲 | いもち病 | トマト | な | 現況 | 発生予想 | ぶどう | べと病 | 黒とう病 | ハダニ類 | アザミウマ類 | 現況 | 発生予想 |
|------|------|-----|---|-----|------|-----|------|------|--------|--------|----|------|
| 稲 | いもち病 | トマト | な | 多 | 多 | ぶどう | べと病 | 黒とう病 | ハダニ類 | アザミウマ類 | 少 | やや少 |
| いもち病 | トマト | な | | 並 | 並 | き | 黒とう病 | ハダニ類 | アザミウマ類 | 多 | 多 | 多 |
| トマト | な | | | 多 | 多 | | | | | | 多 | 多 |
| な | | | | やや少 | やや少 | | | | | | 多 | 多 |
- 水稲の綿葉枯病の発生に注意しましょう
本年の綿葉枯病は、前期発病(ゆうれい症状)の発生が早く、これまで7月上旬に発生ほ場がほとんど見られなかつた県北西部でも広く確認されています。また県中南部では発生株率も多い状況です。今後、出穂期以降は、後期発病(出すくみ等)も増えてきます。発生状況をよく確認し、要防除水準(黄熟期発生株率10%)を超えるほ場が見られる地域では、次年度に向けた対策を検討しましょう。
- 農薬は適正に管理し、正しく使いましょう(6～8月は農薬危害防止運動期間です！)
☆同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーションで散布しましょう。

1か月気象予報(予報期間7月12日から8月11日 7月10日気象庁発表)

期間の前半は半年に比べ曇りや雨の日が多く、気温がかなり高くなる見込みです。期間の後半は半年と同様に晴れの日が多いでしょう。週別の気温は、1週目は高い確率70%、2週目は \bar{x} 年並の確率50%です。3～4週目は \bar{x} 年並または高い確率ともに40%です。

項目	確率	高い(多い)	確率
気温	20%	30%	50%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	40%	40%	20%

NEWS & INFORMATION

☆「平成26年度 農作物等病害虫雑草防除の手引き」が発行されています。お求めの方は、栃木県農業者懇談会(028 647 2622)にお問い合わせください。

詳しくは農業環境指導センター (Tel:028-626-3086 Fax : 028-626-3012) までお問い合わせください。

病害虫情報発表のお知らせは「農政部ツイッター(@tochigi_nousei)」でも発信中です。

平成26年度 病害虫発生予報 第5号

平成26年8月22日
栃木県農業環境指導センター

〇イチゴ炭疽病の発生に注意しましょう！

〇大豆・野菜・花き類のハスモンヨトウ・オオタバコガの増加が懸念されます

予想期間8月下旬～9月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 大豆 べと病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠 現在の発生量は多い(平年比：ほ場率83%)。(+)
- (3) 対策 向こう1か月の日照時間は少ない見込みで、発生に適している。(+)
- (4) 備考 被害茎葉は伝染源になるため、ほ場外に持ち出して処分し、多発したほ場では連作しない。
- (4) 備考 開花期から子実肥大期に薬剤防除を行う。
- (4) 備考 植物防疫ニュースNo.11(大豆：べと病)をホームページに掲載中。

2 大豆 吸害性カメムシ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠 現在の発生量は平均気温(平年比：ほ場率69%)。(±)
- (3) 対策 向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
- (4) 備考 開花期の15日頃から、トレボン乳剤、スミチオン乳剤等を10日～14日間隔で散布する。なお、子実肥大中期(9月上旬)の吸汁害は、減収および品質低下が大きいため9月も防除を行う。
- (4) 備考 植物防疫ニュースNo.13(大豆：吸害性カメムシ類)をホームページに掲載中。

3 大豆・野菜類・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠 現在の発生量は平均気温(平年比：ほ場率152%)。(+)
- (3) 対策 向こう1か月の平均気温は高い見込みで、増殖に適している。(+)
- (4) 備考 定期的にほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生薬とともに摘み取り処分する。
- (4) 備考 ハスモンヨトウの幼虫は齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期に薬剤を散布する。
- (4) 備考 植物防疫ニュースNo.12(大豆・野菜類・花き類：ハスモンヨトウ・オオタバコガ)をホームページに掲載中。

4 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠 現在の発生量はやや多い(平年比：ほ場率152%)。(+)
- (3) 対策 向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
- (4) 備考 発病株は見つけた次第取り除き、ほ場外で処分する。また、潜在感染株を本ばに持ち込まないために、発病株周囲の株は使用しない。
- (4) 備考 水滴の飛散等によって伝染するのを防ぐため、かん水は晴天日の午前中に行い、曇雨天日及び夕方のかん水を控える。
- (4) 備考 症状が出てから防除は困難なので、予防を主体にサンリット水と水和剤(育苗期(定植前)等を散布する。
- (4) 備考 発病株が見られたら、速やかにサンリット水と水和剤等を散布する。
- (4) 備考 植物防疫ニュースNo.8(いちご：炭疽病)、植物防疫ニュースNo.10(いちご：炭疽病・その他王業病)を当センターHPに掲載中。

5 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠 現在の発生量は平年比(平年比：ほ場率117%)。(±)
- (3) 対策 主要薬剤の殺虫効果が低下しており、密度抑制が困難である。(+)
- (3) 対策 向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
- (3) 対策 苗による本ばへの持ち込みを防ぐため、定植前に育苗床での防除を徹底する。

- ・発生が見られたら葉裏のハダニ類を洗い流すように気門封鎖剤を約5日間隔で複数回散布する。
- ・気門封鎖剤を活用し、有効薬剤を温存する。
- ・葉の痛みを防ぐため、高温時や乾きにくい雨天日の散布を避ける。
- ・「園芸作物に発生したハダニの薬剤感受性検査結果」を当センターHPに掲載中。

6 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠 現在の発生量は平年並(平年比：ほ場率138%、葉率68%)。(±)
- (3) 対策 向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
- (4) 備考 場内外の野良生えトマトや雑草は発生源となるため除去する。
- (4) 備考 防虫ネットを展張し施設へのタバココナジラミの侵入を防止する。
- (4) 備考 育苗期から定植前にベスガード粒剤などを散布する。
- (4) 備考 刺鎖剤やアオキ乳剤などを散布する。
- (4) 備考 タバコ類に発生したトマトコナジラミはタバコ黄化葉巻ウイルスを媒介するので注意する。
- (4) 備考 「農業作物に発生したトマトコナジラミの薬剤感受性検査結果」を当センターHPに掲載中。

7 野菜類・花き類 タバコガ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠 8月第3半旬までのフェロモントラップへの誘殺数がやや多い。(+)
- (3) 対策 向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
- (4) 備考 植物組織内部に侵入すると薬剤防除が困難となるため、発生初期に防除する。
- (4) 備考 浸透移行性の高い薬剤の使用も効果的である。
- (4) 備考 施設栽培では、開口部に防虫ネット等を張り、侵入を防ぐ。
- (4) 備考 被害部位はほ場外に持ち出して適切に処分する。
- (4) 備考 果実や花、頂芽などに寄生するため、防除が遅れると被害が大きくなる。寄生されやすい部位をこまめに観察し、虫糞や食入孔を確認する。
- (4) 備考 植物防疫ニュースNo.12(大豆・野菜類・花き類：ハスモンヨトウ・オオタバコガ)を当センターHPに掲載中。

8 その他の病害虫

- | 水稲 | 穂いもち | 穂葉枯病 | うどんこ病 | 現況 | 発生予想 | 現況 | 発生予想 |
|----|------|------|-------|-----|------|--------|------|
| | 多い | 多 | やや少 | やや少 | やや少 | なす | 発生予想 |
| | やや少 | やや少 | やや少 | やや少 | やや少 | ハダニ類 | 発生予想 |
| | やや少 | やや少 | やや少 | やや少 | やや少 | アザミウマ類 | やや多 |
| | やや少 | やや少 | やや少 | やや少 | やや少 | ハダニ類 | やや多 |
- 〇水稲の綿葉枯病の発生に注意しましょう
発生地域が具岡域に拡大しています。ほ場での後期発病(出すくみ)の発生状況を確認し、要防除水準(黄熟期発生株率10%)を超えるほ場が見られる地域では、次作の対策を検討しましょう。
 - 〇いちご本ばへの病害虫持ち込みに注意しましょう
健全株を定植しましょう。
 - 〇葉かび病抵抗性トマト品種を侵すトマト葉かび病菌レースの発生が確認されています
県内で栽培されている抵抗性品種の多くは、確認された葉かび病菌レースに罹病性であるので抵抗性品種を栽培している場合でも本病の発生に注意する。
 - ・「平成26年度病害虫発生予報特報第1号」をホームページに掲載中。

1か月気象予報(予報期間8月16日から9月15日) 8月14日気象庁発表

- ・天気は数日の周期で変わってし、向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率40%です。週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、高い確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。
- 〇気温 低い(少ない) 確率 20%
- 〇降水 低い(少ない) 確率 40%
- 〇日照時間 低い(多い) 確率 40%
- 〇降水 高い(多い) 確率 40%
- 〇日照時間 高い(多い) 確率 40%
- 〇日照時間 低い(少ない) 確率 30%
- 〇日照時間 高い(多い) 確率 30%

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpbn.ne.jp/tochigi/index.html>)までお問い合わせください。
病害虫情報発表表のお知らせは「農政部ツイッター([@tochigi_mouset](https://twitter.com/tochigi_mouset))」でも発信中です。
Tel (028)626-3086 Fax (028)626-3012

平成26年度 病害虫発生予報 第6号

平成26年9月19日
栃木県農業環境指導センター

○イチゴの病害虫は定植後の初期防除が重要です！
○ハスモンヨトウ・オオタバコガの多発生が継続しています！

予想期間9月下旬～10月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い (平年比：ほ場率255%)。 (+)
- (2) 根拠 現在の発生量はやや多い (平年比：ほ場率255%)。 (+)
- (3) 対策 向こう1か月の平均気温は低い見込みで、日照時間は少ない見込み。 (+)
- ・ 実病株は見つけ次第取り除き、ほ場外で処分する。
- ・ 水澆の飛散等によって伝染するので、水の跳ね返りがないようなかん水を行う。
- また、茎葉のぬれ時間が長くないよう、かん水は晴天日の午前中に行い、曇雨天日及びび夕方のかん水を控える。
- ・ 発生が恐れがある場合には、セイロリアーフロアブル20等を散布する。
- ・ 実病株が見られたら、速やかにサンリット水和剤等を散布する。
- (4) 備考 植物防疫ニュースNo.8 (いちご：炭疽病)、植物防疫ニュースNo.10 (いちご：炭疽病、その他の土壌病害) を当センターHPに掲載中。

2 いちご とうどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠 現在の発生量はやや多い (平年比：ほ場率153%)。 (+)
- (3) 対策 向こう1か月の平均気温は低い見込みで、発生に適している。 (+)
- ・ 現在発生がとどまらずに増えるので、適正な温度管理やかん水を行う。
- ・ 軟弱徒長すると発生が多くなるので、今後発生する可能性があるため、保温開始前からフルピカフロアブルやベルクートフロアブル等を散布する。
- ・ 発生が見られたらアミアミスター20フロアブル等を散布する。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠 現在の発生量はやや多い (平年比：ほ場率108%、発生株率181%)。 (+～±)
- ・ 主要薬剤の殺虫効果は低下しており、密度抑制が困難である。 (+)
- ・ 向こう1か月の平均気温は低い見込みで、増殖に不適である。 (-)
- (3) 対策 ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
- ・ 化学農薬に対する感受性低下が著しいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発生しない気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。
- ・ 天敵導入を予定する場合は、導入時にハダニ類が多いと失敗しやすい。定期的に気門封鎖剤などを散布し、ハダニ類の増殖を抑制する。
- ・ 発生が見られたらからからかき作業の洗い流しを行い、気門封鎖剤を約5日間隔で複数回散布する。
- ・ 葉かき後は葉が乾きにくく、高温時や乾きにくい雨天日の散布を避ける。
- ・ 葉の傷みを防ぐため、高温時や乾きにくい雨天日の散布を避ける。
- (4) 備考 園芸作物に発生したナミハダニの薬剤感受性検定結果」を当センターHPに掲載中。

4 大豆・野菜類・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠 9月第2半旬までのフェロモントラップへの成虫誘殺数が多い。 (+)
- (3) 対策 向こう1か月の降水量は平年並み。 (±)
- ・ 定期的にほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生薬とともに捕み取り処分する。
- ・ ハスモンヨトウの幼虫は齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期に薬剤を散布する。
- (4) 備考 植物防疫ニュースNo.12 (大豆・野菜類・花き類：ハスモンヨトウ・オオタバコガ) をホームページに掲載中。

5 野菜類・花き類 タバコガ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠 9月第2半旬までのフェロモントラップへの誘殺数が多い。 (+)
- ・ 向こう1か月の降水量は平年並み。 (±)
- (3) 対策 植物組織内部に食入すると薬剤防除が困難となるため、発生初期に防除する。
- ・ 透過移行性の高い薬剤の使用も効果的である。
- ・ 施設栽培では、開口部に防虫ネット等を張り、侵入を防ぐ。
- ・ 被害部位はほ場外に持ち出して適切に処分する。
- ・ 果実や花、頂芽などに寄生するため、防除が遅れると被害が大きくなる。寄生されやすい部位をこまめに観察し、虫糞や食入孔を確認する。
- (4) 備考 植物防疫ニュースNo.12 (大豆・野菜類・花き類：ハスモンヨトウ・オオタバコガ) をホームページに掲載中。

6 その他の病害虫

いちご	アブラムシ類	アザミソウマ類	うどんこ病	べと病	現況	発生予想	現況	発生予想
やや多い	やや少	やや多	やや多	やや多	アザミソウマ類	アザミソウマ類	アザミソウマ類	アザミソウマ類
やや多	やや多	やや多	やや多	やや多	トマト	トマト	トマト	トマト
やや多	やや多	やや多	やや多	やや多	ねぎ	ねぎ	ねぎ	ねぎ
やや多	やや多	やや多	やや多	やや多	きく	きく	きく	きく

○水稲の雑草枯病の拡大を防ぎましょう

・ 雑草枯病が発生したほ場の再生稲 (ひこばえ) は媒介虫のヒメトビウソガの増殖源と雑草枯ウイルスの獲得源となります。早期の丁寧な耕起により次年産の本病拡大を防ぎましょう。

○トマトの養化葉巻病 (TYLCV)

・ TYLCVはタバココナジラミによって媒介され、冬春トマトで発生が多く見られています。媒介虫や感染源となる雑草植物を施設内に「入れない」対策の徹底が重要です。

※ 植物防疫ニュース (連報No.14)「タバココナジラミ防除を徹底し、トマト養化葉巻病を防ぎましょう」参照。

○いちごのアザミソウマ類

・ 頂花序の開花が10月上旬以前から見られる施設では、秋からアザミソウマ類が発生しやすく、翌年の発生も早くなる傾向にあるため、注意が必要です。

○ナシ黒星病 (秋季防除)

・ 病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となるため、収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく葉液がかかると、園内外の落葉を集めて適切に処分しましょう。防除の際は周辺へ飛散 (ドリフト) しないよう十分注意しましょう。

※ 植物防疫ニュース (連報No.16)「ナシ黒星病の秋季防除を徹底しましょう」参照。

1か月気象予報 (予報期間9月13日から10月12日 9月11日気象庁発表)

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みです。向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は低い確率70%です。2週目は平年並の確率50%です。

気温	湿度	降水	日照時間	確率
低い (少ない)	低い (少ない)	低い (少ない)	低い (少ない)	高い (多い)
40%	40%	40%	40%	20%
30%	30%	30%	30%	30%
40%	40%	40%	40%	30%

NEWS & INFORMATION

☆「栃木県農業管理指導士」養成研修 (11月20日、21日)・更新研修 (11月20日) が開催されます。申込期間が10月1日～31日となりますので、特に更新対象者の方はお忘れなく申込みください。詳しくは農産部経営技術課環境保全部型全型農業担当までお問い合わせください。
Tel(028)623-2286

詳しくは農業環境指導センター (Tel 028-626-3086) までお問い合わせください。
(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>)

病害虫情報発表表のお知らせは「農政部ツイッター (@tochigi_nousei)」でも発信中です。

平成26年度 病害虫発生予報 第7号

平成26年10月24日
栃木県農業環境指導センター

〇イチゴの害虫、トマト葉かび病の発生増加に注意しましょう！

予想期間10月下旬～11月下旬
予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

- 1 いちご うどんこ病
- 発生量：やや少ない
 - 現在の発生量は平年並(平年比:ほ場率60%、発生株率76%)。(±)
 - 向こう1か月の平均気温は高い見込み。(一)
 - 軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な温度管理やかん水を行う。
 - 多発してから防除は難しいため、現在発生が見られない場合でも予防を主体にアエツトップフロアブルやタフバール等を散布する。
 - 発生が見られたらトリフロミン水やガッテン乳剤等を散布する。

- 2 いちご ハダニ類
- 発生量：やや多い
 - 現在の発生量は平年並(平年比:ほ場率88%、発生株率101%)。(±)
 - 主要薬剤の殺虫効果が低下しており、密度抑制が困難である。(十)
 - 向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生にやや適している。(±)
 - ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
 - 化学農薬に対する感受性低下が著しいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しない気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。
 - 発生が見られたら葉裏のハダニ類を洗い流すように気門封鎖剤を約5日間隔で複数回散布する。

- (3) 対策
- 葉かき後は薬剤がかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
 - 葉の傷みを防ぐため、高温時や乾きにくい雨天目の散布を避ける。
 - 天敵を導入する場合、導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいため、定期的に気門封鎖剤などを散布し、導入前にハダニ類の増殖を抑制しておく。
- (4) 備考
- 「園芸作物に発生したナメハダニの薬剤感受性検定結果」を当センターHPに掲載中。

- 3 いちご アザミウマ類
- 発生量：多い
 - 現在の発生量はやや多い(平年比:ほ場率150%、発生株率178%)。(十)
 - 向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(十)
 - 雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、施設内の除草を行う。
 - 低密度のうちにかスケード乳剤[カキイロバシ]かアタプロン乳剤[カキイロバシ]等のIGR剤を散布する。
 - 花を観察して、1割以上でアザミウマ類が見られた時は、被害が大きくなる恐れがあるため、デリアナSC等を散布する。
 - 開花が早い作型では、秋期のアザミウマ類の発生が多い傾向にあるので、発生に注意する。
- (4) 備考
- 植物防疫ニュースNo.16(いちご:アザミウマ類)、「園芸作物と花きに発生したアザミウマ類の薬剤感受性検定結果(続報)」を当センターHPに掲載中。

- 4 トマト 葉かび病
- 発生量：やや多い
 - 現在の発生量は多い(平年比:ほ場率535%、発生株率200%)。(十)
 - 向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生にやや不適である。(一)
 - 施設内が多湿になりやすいように換気やかん水に注意する。
 - 肥料切れ等により生育が衰えると発生しやすいので、肥培管理に注意する。
 - 養菌薬は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
 - 予防を主体にべルクルーフフロアブルやアファジンタフロアブル等を散布する。
 - 発生が見られたらトリフロミン水やガッテン乳剤等を散布する。
- (4) 備考
- 抵抗性品種に感染するレーヌが確認されているため、抵抗性品種を栽培している場合でも、発生に注意する(平成26年度病害虫発生予報第1号参照)。

5 野菜類・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠 ・10月第2半旬までのフェロモントラップへの成虫誘殺数がやや多い。(十)
- ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(十)
- (3) 対策 ・定期的には観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生薬とともに摘み取り処分する。
- ・ハスモンヨトウの幼虫は齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期に薬剤を散布する。
- (4) 備考 ・施設栽培では、開口部に防虫ネット等を張り、侵入を防ぐ。
- ・植物防疫ニュースNo.12(大豆・野菜類・花き類:ハスモンヨトウ・オオタバコガ)をホームページに掲載中。

6 その他の病害虫

いちご	アブラムシ類	コナジラミ類	アザミウマ類	ハダニ類	発生予想
トマト	成色かび病	疫病	コナジラミ類	うどんこ病	発生予想
きゅうり	うどんこ病	うどんこ病	うどんこ病	うどんこ病	発生予想

秋冬の病害虫防除対策

- 〇イネ綿葉枯病、イネ黄萎病
 - ・圃場が再生したほ場の再生稲(ひこばえ)は媒介虫の増殖源とウイルスやアフトブラズマの伝染源となります。早期の丁寧な耕起により次年産の本病拡大を防ぎましょう。
- 〇トマト黄化葉巻病(TYLW)
 - ・雑草はタバコジラミの増殖源となるため、施設内外の除草を徹底しましょう。
 - ・罹病株は伝染源となるので見つけただけは抜き取り、抜き取った株は放置せず、速やかにビニール袋などで密閉し、枯死させて処分しましょう。
 - ※圃防ニュース(速報No.14)「タバコジラミ」防除を徹底し、トマト黄化葉巻病を防ぎましょう。
- 〇ナシ黒星病(秋季防除)
 - ・病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の伝染源となるため、収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく葉液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行い、園内外の落葉を集めて適切に処分しましょう。防除の際は周辺へ飛散(ドリフト)しないよう十分注意しましょう。
 - ※圃防ニュース(速報No.15)「ナシ黒星病の秋季防除を徹底しましょう!」参照。

〇農薬は適正に管理し、正しく使いましょ！

- ☆同一薬剤の運用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。
- ☆同一薬剤の運用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

1か月気象予報(予報期間10月18日から11月17日 10月16日気象庁発表)

天気は教日の周期で変わるでしょう。平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みです。向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は高い確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

気温	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
〇気温	20%	30%	50%
〇降水量	30%	40%	30%
〇日照時間	30%	30%	40%

〇農薬の使用方法が変わります

農薬の残留基準値を設定する際に新たな評価項目が導入されたことに伴い、今後使用できなくなる農薬及び使用方法が変更される農薬があります。

農薬ラベルに記載された使用方法で使用した場合、今後収められた農作物の残留基準値を超過する恐れがあるので、注意が必要です。

詳しくは農業環境指導センターのHP (<http://www.jpnpn.jp/tochigi/index.html>) をご覧ください。

詳細は農業環境指導センター(Tel. 028-626-3086)までお問い合わせください。
病害虫情報表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ「<http://www.jpnpn.jp/tochigi/index.html>」でもご覧いただけます。

平成26年度 病害虫発生予報 第8号

平成26年11月21日
栃木県農業環境指導センター

〇いちごうどんこ病、トマト葉かび病は予防と初期防除が重要です。

予想期間11月下旬～12月下旬
予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根拠 現在の発生量は平年並(平年比：ほ場率63%、発生株率63%)。(±)
向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並～多く、日照時間は平年並～少ない見込みで、発生にやや適している。(±～+)
(3) 対策 軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な温度管理やかん水を行う。
・現在発生が見られなくても、今後発生する可能性があるため、予防を主体にアフェットフロアブルやガッテン乳剤等を散布する。
・発生を予防するため、保温開始後は硫酸粒剤でくん煙する。硫黄くん煙は大敵に対し悪影響があるため、長時間の使用は避ける。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
(2) 根拠 現在の発生量は平年並(平年比：ほ場率130%、発生株率127%)。(±)
・主要薬剤の殺虫効果が低下しており、密度抑制が困難である。(+)
向こう1か月の気温は平年並、日照時間は平年並～少ない見込みで、発生にやや適していない。(±～+)
(3) 対策 ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・化学農薬に対する感受性低下が著しいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しない気門封鎖剤や天敵型剤を活用する。
・発生が見られたら葉裏のハダニ類を洗い流すように気門封鎖剤を約5日間隔で複数回散布する。
・天敵導入を予定する場合、導入時にハダニ類が多いと失敗しやすい。導入前に薬剤防除を行い、ハダニ類の増殖を抑制する。また、薬剤の選定時には天敵への影響を考慮する。
(4) 備考 「園芸作物に発生したナミハダニの薬剤感受性検定結果」を当センターHPに掲載中。

3 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
(2) 根拠 現在の発生量は平年並(平年比：ほ場率90%、発生株率116%)。(±)
向こう1か月の気温は平年並、日照時間は平年並～少ない見込みで、発生にやや適していない。(±～+)
(3) 対策 ハウス内での増殖が主体となるので、発生が見られたらカスケード乳剤〔シヤキヤブサシ〕かアタブロン乳剤〔シヤキヤブサシ〕等のIGR剤を散布する。
・花を観察して、1割以上でアザミウマ類が見られた時は、被害が大きくなる恐れがあるため、アザミウマSC等を散布する。
(4) 備考 植物防疫ニュースNo.16(いちご：アザミウマ類)、「園芸作物と花きに発生したアザミウマ類の薬剤感受性検定結果(総報)」を当センターHPに掲載中。

4 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根拠 現在の発生量は平年並、降水量は平年並～多く、日照時間は平年並～少ない見込みで、発生にやや適している。(±～+)
(3) 対策 施設内が多湿にならないよう換気やかん水に注意する。
・肥田剤等により生育が衰えるため、発生初期に速やかに取り除き施設外で処分する。
・病害葉は伝染源となるため、発生初期にフロアブルやアフェットフロアブル等を散布する。
・予防を主体にベルコートフロアブルやアフェットフロアブル顆粒水和剤等を散布する。
・発病初期にトリフミン水和剤やファンタジスタ顆粒水和剤等を散布する。

- (4) 備考 抵抗性品種でも発病するレースがあるため、発生に注意する。
植物防疫ニュースNo.17(トマト：葉かび病)を当センターHPに掲載中。

5 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根拠 現在の発生量はやや多い(平年比：ほ場率109%、発生株率393%)。(+)
向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並～多く、日照時間は平年並～少ない見込みで、発生にやや適している。(±～+)
(3) 対策 施設内が低温多湿にならないよう、日中に適度な換気を行う。
・捨てた葉は伝染源となるため、施設外に持ち出し、適切に処分する。
発生初期にストロピフロアブル、ポリオキシンA.L.水溶液を散布する。

6 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
(2) 根拠 現在の発生量は平年並(平年比：ほ場率74%)。(±)
・主要薬剤の殺虫効果が低下しており、密度抑制が困難である。(+)
向こう1か月の気温は平年並、日照時間は平年並～少ない見込みで、発生にやや適していない。(±～+)
(3) 対策 薬剤の効果が易い生育初期から防除を行う。
・葉裏をよく観察し、発生が見られたら、下葉や葉裏にもよくかかかのように丁寧に気門封鎖剤やアザミウマ類(花き類・観葉植物)等を散布する。
(4) 備考 「園芸作物に発生したナミハダニの薬剤感受性検定結果」を当センターHPに掲載中。

7 その他の病害虫

いちご	灰色かび病	発生予想	状況	発生予想	状況	発生予想
トマト	灰色かび病	やや少	少	やや少	やや多	やや多
	コナジラミ類	平年並	平年並	平年並	やや多	やや多

秋冬期の病害虫防除対策

- イネ絹葉枯病、イネ黄萎病
・罹病した再生稲(ひこぼえ)は次年度の伝染源となるため、早めに丁寧に耕起しましょう。
○トマト黄化萎病(TYLCV)：タバココナジラミ媒介
・罹病株は伝染源となるので見つけたいば抜き取り、抜き取った株は放置せず、速やかにビール袋などで密閉し、枯死させてから処分しましょう。また、野外からのコナジラミ類の侵入が途切れる時期であるため、ハウス内に越冬虫を残さないための防除をこころがけましょう。

- 農薬は適正に管理し、正しく使いましょ！
☆ミミズバチやマルハナバチに対する安全日数を目安に薬剤を選択しましょう。
☆同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

1か月気象予報(予報期間11月15日から12月14日 11月13日気象庁発表)

平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、低い確率50%、2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

気温	低い(少ない) 確率	平年並の確率	高い(多い) 確率
○降水量	30%	40%	30%
○日照時間	20%	40%	40%
	40%	40%	20%

○農薬の使用 방법이変わります

農薬の残留基準値を設定する際に新たな評価項目が導入されたことに伴い、今後使用できなくなる農薬及び使用方法が変更された農薬があります。
農薬をラベルに記載された使用方法で使用した場合でも、今後改めて設定される農作物の残留基準値を超過する恐れがあるので、注意が必要です。
詳しくは農業環境指導センターのHP (<http://www.jpnm.ppmm.ne.jp/tochigi/index.html>) をご覧ください。

詳しくは農業環境指導センター(TEL 028-626-3086)までお問い合わせください。
病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi_nouse)」, 農業環境指導センターホームページ (<http://www.jpnm.ppmm.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧いただけます。

平成26年度 病害虫発生予報 第9号

平成26年12月19日
栃木県農業環境指導センター

○果菜類の灰色かび病、トマト葉かび病の増加に注意しましょう！

予想期間12月下旬～1月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根拠 現在の発生は平年並 (平年比：ほ場率70%、発生株率64%)。(±)
(3) 対策 向こう1か月の気温は低く、養生に適している。(+)
・ 施設内が多湿にならないよう、日中に適度な換気を行う。
・ 施肥が適量にならないよう、適度に肥料を散布する。
(4) 備考 発生が認められる場合は、サンリット水和剤やカリグリーン等を散布する。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
(2) 根拠 現在の発生は平年並 (平年比：ほ場率110%、発生株率110%)。(±)
(3) 対策 主要薬剤の殺虫効果は低下しており、密度抑制が困難である。(+)
(4) 備考 向こう1か月の気温は低く、増加に適していない。(+)
・ 必要に応じて葉かきを行い、薬剤がかりやすい状態を避ける。
・ 気門封鎖剤は卵には効果が無いので、複数回、十分量を散布する。
・ 天敵製剤を使用する場合は、放向前に一度防除し、ハダニ類の密度を下げる。
・ また、使用する薬剤は天敵に影響のないものを選択する。
・ 天敵放飼から1～2週間は薬剤散布を避ける。
・ 「園芸作物に発生したナミハダニの薬剤感受性検定結果」を当センターHPに掲載中。

3 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根拠 現在の発生はやや多い (平年比：ほ場率378%、発生株率50%)。(+)
(3) 対策 向こう1か月の気温は低く、発生に適している。(+)
・ 施設内が多湿にならないよう換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。
(4) 備考 咲き終わった花卉や落果、発病葉は感染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。
・ 防除は予防を主体にセイビアーフローアブル20、ファンベル顆粒水和剤等を葉裏にも良くかかると効果的。
・ 微生物防除資材(ボトキラー水和剤等)は発病前～発病初期に利用する。また、低温条件下では効果が出にくいので、10℃以上が確保できる施設内で使用する。
・ 植物防疫三ニュースNo.19(トマト：灰色かび病)を当センターHPに掲載中。

4 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根拠 現在の発生は多い (平年比：ほ場率617%、発生株率755%)。(+)
(3) 対策 向こう1か月の気温は低く、発生に適している。(+)
・ 施設内が多湿にならないよう換気やかん水に注意する。
・ 肥培管理に注意する。
(4) 備考 肥切れ等により生育が衰えること発生しやすいので、肥培管理に注意する。
・ 発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き施設外で処分する。
・ 防除は予防を主体にダイマジンやポリオキシンA.L.乳剤等を散布する。
・ 抵抗性品種でも発病するレースがあるため、発生に注意する。
・ 植物防疫三ニュースNo.17(トマト：葉かび病)を当センターHPに掲載中。

5 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根拠 現在の発生は平年並 (平年比：ほ場率74%、発生株率149%)。(±)
(3) 対策 向こう1か月の気温は低く、発生に適している。(+)
・ 施設内が低湿多湿にならないよう、日中に適度な換気を行う。
・ 捨て刈りした葉は伝染源となるため、施設外に持ち出し、適切に処分する。
・ 発生初期にストロビーフロアブル、ポリオキシンA.L.水和剤を散布する。

6 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
(2) 根拠 現在の発生は平年並 (平年比：ほ場率108%、発生株率135%)。(±)
(3) 対策 主要薬剤の殺虫効果が低下しており、密度抑制が困難である。(+)
(4) 備考 向こう1か月の気温は低く、増加に適していない。(+)
・ 薬剤の効果がかり易い生育初期から防除を行う。
・ 葉裏をよく観察し、発生が見られたら、下葉や裏にもよくかかると同時に丁寧に薬剤を散布する。
・ 「園芸作物に発生したナミハダニの薬剤感受性検定結果」を当センターHPに掲載中。

7 その他の病害虫

いちご	発生予想	発生予想	発生予想	発生予想	
灰色かび病	平年並	やや多	きゅうり	うどんこ病	やや多
コナジラミ類	平年並	やや多	べと病	白さび病	やや多
トマト	平年並	やや多	きく	白さび病	やや多

イネ縮葉枯病の防除対策

平成26年のヒメトビウシカ越冬世代幼虫のイネ縮葉枯病ウイルス保有率は平均9.9%と高く、ウシカ類幼虫密度も平年比432%と多い状況でした。刈り残し株や水田内のイネ科雑草はヒメトビウシカの生息場所となる恐れがありますので、また、耕起をしていない場合は速やかに耕起を行いましょう。

植物防疫三ニュースNo.18(水稲：イネ縮葉枯病)を当センターHPに掲載中。

○農業は適正に管理し、正しく使いましょ！

☆ミツバチやマルハナバチに対して安全な日数を目安に薬剤を選択しましょう。
★同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーションで散布しましょう。

1か月気象予報(予報期間12月13日から12月11日気象庁発表)

平年と同程度の日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、低い確率60%です。降水量、日照時間は、平年並の確率40%です。週別の気温は、1週目は、低い確率80%、2週目は、低い確率40%です。

気温	降水	日照	確率
低い(少ない)	低い(少ない)	高い(多い)	確率
60%	30%	10%	10%
30%	40%	30%	30%
30%	40%	30%	30%

○農業の使用方法が異なります

農薬の残留基準値を新たに評価項目(短期暴露評価)が導入されたことに伴い、今後使用できない農薬及び使用方法が変更される農薬があります。
農薬をラベルに記載された使用方法で使用した場合でも、今後改めて設定される農作物の残留基準値を超過する恐れがあるので、注意が必要です。

詳しくは農業環境指導センター(Tel. 028-626-3086)までお問い合わせください。
病害虫情報発表表のお知らせはツイッター「栃木県農政課@tochigi_nousei」、農業環境指導センターホームページ「<http://www.ipppn.ne.jp/tochigi/index.html>」でもご覧いただけます。